

『思い思いの若者たち』

一川崎事件を問うー（2）

事務局長 布袋 太三

前号からの続きです。「川崎事件」報道のある時期からメディアの姿勢はひきこもり関係者にとつてはなんとも耐え難いものでした。

言うまでもなくひきこもりの人たちは一人一人が異なる背景ときっかけでひきこもりに至っています。彼らの生活の仕方も実は本当に様々です。

ただ精神的苦痛が助長されるかもしれないような他人との関わりはなるべく回避したいという気持ちはほぼ共通していますので、理由のない外出や多数の人々との接触は極力避ける傾向にあります。従って、川崎事件のような事件とひきこもりは通常なかなかつながりえないことでした。にもかかわらず、メディアは強引にひきこもりだから凶行に及んだかのような、あるいはひきこもりはそうした闇を抱えているもののように報じ、しかも「一人で死ねば」など無神経な罵声さえも蔓延させました。

こうして一時とはいえ世情はメディアに煽られひきこもりへの剥き出しの不寛容さを露にしたのです。

ひきこもりとその家族はますます孤立を余儀なくされました。

そんななか日本精神衛生学会とメンタルヘルス・ビューローは『ひきこもりが事件をもたらしたのか?』という緊急フォーラムを呼びかけ、その場

で座長の高塚雄介氏は「真相は解明途中だが川崎の容疑者はひきこもりの中核にある人とは別のある種の病理を有していたのかもしれない」と指摘したのです。

またジャーナリストの池上正樹氏と支援組織の二伸能基氏はこぞって「彼を絶望的に追い詰める某かの具体的な事情が必ず直近にあったはずだ。そこで対応如何で最悪の事態は避けたと思う」と明言しました。

これらの言説を受けて、この不幸な事件は改めて深い真相解明の作業に委ねられるべきだと私は考えています。

さて、周知のとおり、現代のように効率とスピードに絶大な価値をおく社会ではそこからこぼれ落ちる相当数の犠牲者を不可避免的に産み出してしまう。犠牲を強いられた者たちの中にひきこもりは多数いると思われますが、それにしても 115 万人というひきこもりの数は多過ぎます。この数字の意味することは非情で底の知れない現代の社会的病理へのギリギリの警鐘なのかもしれません。

今こそ社会全体がいろいろな生きづらさを抱える人々への穏やかで寛容な関心を寄せるべきではないでしょうか。



坂倉 晃代



岩崎 美由紀



スタッフ紹介

昨年 9 月よりひきこもりサポート事業ひなたの森で相談支援員、学習支援担当として従事しています。

ひなたの森の居場所では、ゲームをしたり食事作りをしたり社会参加活動に付き添ったりと、毎日楽しく過ごしています。学習支援業務では、不登校により学習に遅れのある子どもやひきこもりにより就学できなかった方々に学びなおす機会を設け、先生方の手伝いをしながら進学に向けた支援をしています。

これからも、当事者やその家族の第三者的な立場の一人として、一人ひとりに寄り添って支援していきたいです。

社会に出る前の第一歩として、気軽にひなたの森へ遊びに来もらえたなら嬉しいです。今後ともよろしくお願ひいたします。

昨年 7 月より就労準備支援員として就労準備支援事業に携わっています。20 代、30 代の若者を中心とした事業利用者さんの働く現場に同行して一緒に働かせていただいています。

主な同行現場は法人経営のカフェルルコロや菓子工房ですが、10 月からはひなたの森の一室で着物リメイクの縫製作業にも取り組んでいます。

役割としては働くことをサポートする側となっていますが、就労現場によっては私自身初めて経験する仕事内容もあるので、メンバーと共に一緒に試行錯誤で仕事をさせてもらっています。

就労現場で若者が仕事をする経験を積むことをサポートすることだけでなく、それぞれの課題や困りごとなどにも注意を向けて支援できるように心がけています。

働くを通じて、新たな自分を発見したり成長したりできる機会のお手伝いが出来たらうれしいです。どうぞよろしくお願ひいたします。

ひきこもりなどの 困りごとをもつ若者とどうつきあう? ～訪問診療を行う精神科医の立場から～

【講 師】岩谷 潤氏(和歌山大学保健センター准教授)

【日 時】令和 2 年 2 月 8 日 午後 13:30 ~ 15:30

【会 場】東牟婁振興局三階大会議室
和歌山県新宮市緑ヶ丘 2-4-8